



NPO法人 大磯ガイド協会

照ヶ崎

第44号

令和3年2月1日



〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯995-12-B
TEL 0463-73-8590 FAX 0463-73-8591
ホームページ <http://www.oisoguide.com>

百年前のパンデミック「スペイン風邪」と大磯

武山 加根子

今から100年前にも、現在の新型コロナウイルスの蔓延と同じような状況下にあった。大正7年(1918)から大正10年(1921)までの4年間に、スペイン風邪が猛威をふるった。推定死者が世界で5千万人、日本では45万人と言われる世界的大流行(パンデミック)があった。当時は「流行性感冒」と呼ばれて、その流行がいつ始まり、いつ終わったのか明確にはできないままだった。病原体も明らかになっていなかったため、予防法も治療法も、それぞれの医師や医療機関が独自の判断に基づき、懸命の対応をしたというのが実情だった。北里研究所や帝国伝染病研究所が、日夜尽力して製造したワクチンも、大きな効果がなかったとされた。

小田部雄次著の『百年前のパンデミックと皇室』では、梨本宮伊都子妃の日記から、スペイン風邪流行の猛威と、当時の大磯の様子を知ることができる。彼女の周辺では、皇族の竹田宮宣仁や弟の鍋島貞次郎、妹の牧野茂子、高齢の侍女頭が亡くなった。伊都子自身も数回風邪の症状が出たが、幸いなことに回復した。そのあと流行が去ったと思われた大正11年に、父の鍋島直大が亡くなり、孫の晋(李垠・方子の長男)も亡くなった。

また『原敬日記』には、大正7年10月、北里研究所の祝宴に招かれた原敬がスペイン風邪にかかったと記されている。山縣有朋が大正11年2月1日に小田原の古稀庵で亡くなったのもスペイン風邪とされる。大正8年に大山巖の妻捨松も亡くなった。同年に同病で島村抱月が亡くなると、松井須磨子が後追い自殺をした。

鈴木昇著『大磯の今昔(八)』の中では、スペイン風邪の流行を大磯町助役の書いた『小見日誌』から紹介している。「大正7年10月25日、大磯地方の悪性感冒本月中旬より流行」、「流感予防注射申請、注射液不足」など深刻な様子が見えがえる。県立伝染病専門病院の大磯避病舎(ひびょうしゃ)の記述もある。大磯小学校や妙輪寺、嶋立庵などが予防注射の会場となった。画家の安田靉彦は、「大正9年1月にかかったが、2月14日に床上げできた」との記述もある。

現在、全国の新規感染者数は急増し、連日最多を更新している。1月7日、政府は2度目の「緊急事態宣言」を発出した。2021年はどのようになっていくのだろうか。ワクチンが待たれるばかりである。先の見えない状況下、私たちのガイド活動は、マスク着用、3密(密閉・密集・密接)をさけて、慎重に歩いていくしかないだろう。

— 今後の企画ガイド予定 —

No.	月日	企画ガイド(略称)	No.	月日	企画ガイド(略称)
1	2/5・6	※大磯の梅の名所を訪ねる(中止)	4	4/ 3	春爛漫 湘南アルプス縦走ハイク
2	3/11	大磯に住んだ8人の宰相たち(中止)	5	4/	※大磯のオープンガーデン
3	3/14	同上	6	5/	同上

※共催事業

活動報告 令和2年11月～令和3年1月

—— まち歩きガイド「政界の奥座敷」—— 12月10日(木) お客様10名 ガイド2名

ご案内したお客様は、東京都立大の理事長と若者で構成する「観光戦略プロジェクト」の視察団でした。大磯駅前、まず「大磯になぜ8人もの総理大臣が集まったのか？」との理事長からの質問がありました。「これからご案内させていただく中から答えを見つけてくださいね」と返事し、ガイドをスタートしました。

申込者との数回にわたる連絡から、何に興味を持っているのかをしっかりと察知することができました。「政界の奥座敷」と「8人の宰相」に興味があるということで、事前に考えていたコースを変更して、明治記念大磯邸園に時間をかけることと、「8人の宰相」を追加することにしました。そこで、伊藤博文を中心とする人物相関図「明治政界の奥座敷・大磯」と、「8人の宰相の写真」を用意し、「散策コース地図」を作成しました。

当日、駅から地福寺へと案内し、「新杵」前の信号待ちで、原敬邸宅跡の場所をお知らせしたところ、理事長から「そこへ是非行きたい！」とのリクエストがあり、急遽コース変更をして案内することにしました。原敬、陸奥宗光に大変興味を持たれ、尊敬していることが分かりました。明治記念大磯邸園に入る前に「政界の奥座敷」と「立憲政治」の説明をしました。最後に旧吉田茂邸を巡り、その豪華な邸内にもご満足いただけたと思います。「大磯はいいねえ！もう一度大磯をやろうよ！」と理事長からの感想をいただき、駅前での答えも見つけることができたようでほっとしました。

(杉本 純子)



明治記念大磯邸園 旧大隈邸

—— 映画「日本独立」から見る吉田 茂 ——

昨年12月、横浜市内の映画館で、「日本独立」(監督:伊藤俊也)という映画を観ました。この作品は、戦後の日本国憲法の制定を巡る吉田茂(役:小林 薫)とその右腕である白洲次郎(役:浅野忠信)が、日本国憲法の制定を巡り、マッカーサー率いるGHQとの攻防を描いた作品です。

映画の中では、私たちの活動の拠点である、大磯の吉田邸のシーンも多々出てきました。その中で印象的だったのが、吉田邸内の応接間(現在の楓の間)のシーンです。

吉田と新憲法制定担当の松本大臣(役:柄本 明)が、GHQ幹部と憲法草案について対峙。GHQは、GHQの求める憲法草案を早急に提出するよう、吉田らに命じます。敗戦国である吉田らには、返す言葉はありません。それを嘲笑するかのように、吉田邸の上空を米軍のB29が、轟音を響かせ低空で飛び去っていきます。

映画の中では伏線として、戦死した戦艦大和の若い兵士の物語が描かれていました。日本の新たな独立は、多くの若き戦死者の上に成り立っていることを物語っていました。

この映画を観終わって、吉田邸内にある兜門は、戦後の再独立と国の平和を希求し、吉田が建設した門、すなわち「講和条約門」であることを再確認しました。現在の上皇陛下ご夫妻が、皇太子時代に吉田邸を訪問された際の写真が残っています。吉田は満足そうで、穏やかな顔をしています。吉田の兜門への深い想いを察してでしょうか、車を降りて徒歩で門をくぐられています。

(原田 忠志)



兜門(講和条約門)

新人ガイド 紹介

※今年度の新人教育は10月までに基礎コースを終わり、本科コースに入っています。自己紹介と感想など語っていただきました。来年度からの新鮮なガイドが期待されます。どうぞよろしく！！



【介護とガイド】

某会社を辞めるにあたって、「第二の人生をどう過ごすか？」と、思案もせず軽い気持ちでガイドに応募した。今までは人とのつながりをことごとく断ち、群れを嫌って生きてきた。今年89歳になる認知症の、昼夜逆転した母の介護とガイドは、さらにきつくなるが、将来の楽しみとして人生をすごしたいものだ。今は亡き尊敬する浜口哲一先生(元平塚博物館館長)が、「君はトコロジスト(注)になりなさい」と言ってくれた。「その土地の歴史・文化・芸能・生物・科学をこの人に聞けばなんでもわかるような博識者になりなさい」と。(注:浜口氏が提唱した造語)

いざ、研修となると、大磯に居ながら知らないことばかりで、人前に立って話をするというハードルの高さに、ついていくのがままならなかった。先輩方に見守られながら研修によるロールプレイングで、ほんの少し近づいた気がする。令和3年辛丑では辛いことも経験を積み一步一步、牛のように地面を踏ん張って修練を積み、早く立ちできるよう頑張りたいと思っている。(福田 良昭)

【新人研修に参加して】

昨年9月から新人研修が始まりました。旧吉田茂邸では、経験豊富な諸先輩方の名解説を拝聴し、すぐに自分に取り入れることができるもの、今の自分のキャラでは難しいが目標にしたいものなどをたくさん提示していただきました。また、ロールプレイングで実践的な練習もさせていただき、お陰様でなんとか説明できる自信もつきました。

その後、大磯邸園、鳴立庵・藤村邸、…と研修は続いています。覚えることが想像以上に多く、消化できていないのが実情です。諸先輩方の実際のガイドについて行って、お手伝いをさせていただきながら、少しずつ自分のものとしていければと思っています。

私は横浜市の県立四季の森公園や秦野市くずはの家で植物の解説をしていますが、大磯には豊かな自然がたくさん残っています。いつか地元大磯の自然を案内するイベントを企画し、文化と自然に恵まれた大磯の魅力を少しでも多くの人に伝えることができればと思っています。(金子 正美)



【初めまして、新人の青木と申します】

生まれは北アルプスの麓 長野県の安曇野で、平塚に住んでいます。ガイド協会の活動に興味を持ったのは、昨春、鶴瓶が主演し、吉田茂を主人公とした「アメリカに負けなかった男」を見たのがキッカケでした。明治維新の人物の生き様と、その「つながり」には興味がありましたが、この番組を機に色々調べていくうちに、「もしかしたら、明治の歴史の幾つかは、ここ大磯で決まったのかもしれない?」と、明治の元勳たちのロマンを感じていました。そんな折、コロナ禍の中でしたが事務局に応募し、先輩のガイドに付いて9月から勉強中です。私の特技(よくある失敗)は、新たな人物を創造することです。例えば、吉田五十八と中島健を合わせて「中島五十八」という新たな人物を……と言うように。大磯庭園は今後公開の範囲が大きくなると聞いています。旧吉田邸を含め「明治を創った人々と、戦後の日本を創った男の“住処”」というキャッチコピーで大磯をアピールできたらと考えます。少しでもそのお役に立てるよう、楽しんでやっていきたいと思っています。(青木 秀尚)

はじめに

大磯は明治の元勳が競って居を構え、人の縁により成立した高級リゾート地として繁栄した歴史を持つ。その人の縁の中心は初代総理大臣「伊藤博文」であり、彼の周辺の薩長閥による政府中枢の主流の人々であった。彼らの生命を賭した情熱により明治維新が成し遂げられたことは疑いのない事実であり功績である。その前提にたち、明治の主流とは異なった歴史の流れである反薩長運動の一つとも云える「自由民権運動」について、その概要を述べてみたい。民権運動は明治6年の征韓論により下野した人々のうち明治政府に武力抵抗しなかったグループでスタートし、期間は明治17年自由党の解散までの10年間である。結果的にこの運動は主流に収斂されたが、帝国議会の開設や明治政府の政策に民意を反映させる契機となった。大磯でこの運動に参加した知識人たちは運動の思想を具体化し海水浴場の開設など地域活性化に貢献した。次回から数回に亘り、地租改正反対運動、国会開設請願、湘南社、明治14年の政変、真土事件、露木事件、運動激化と衰退、民権運動思想の発展など連載する予定である。

1 自由民権運動のスタート 征韓論から西南戦争まで

明治維新により四民平等政策のもと、大名・武士階級を廃し、華族・士族を創設する秩禄処分により家禄制度は撤廃され、廃刀令の施行など身分的特権も全廃された。また文明開化、殖産興業政策による西洋技術文化の導入などが積極的に実施された。このような時機に朝鮮開国を巡り、内治優先の岩倉使節団の外遊グループと征韓派の留守グループとの意見が割れ、留守グループの板垣退助(土佐)西郷隆盛(薩摩)、江藤新平(肥前)、後藤象二郎(土佐)、副島種臣(肥前)らは一斉に下野した。この明治6年の政変は士族に大きな影響を及ぼし、各地で不平士族の反乱が頻発した。



愛宕神社慰霊碑

明治7年、江藤新平が故郷の佐賀で擁立されて佐賀の乱を起こし、次いで明治8年、熊本の神風連の乱、福岡の秋月の乱、山口では萩の乱などが続き、いずれも明治政府に武力鎮圧された。士族の主たる不満は、世襲給与の代わりに支給された公債の利子の額だった。その利子が給与に相当した。一家族を1年間養う費用は100円程度だったが、下級武士26万人の年間利子は平均29円、上中級武士1万5千人が97円、そして華族519人は3,026円だった。既得権を失った士族の憤懣を示す事象である。

また明治10年には旧薩摩藩の士族が中心となり、西郷隆盛を大将に擁立した国内最大規模の内戦である西南戦争が勃発、政府は反乱軍の2倍以上の兵力を投入し鎮圧したが、西郷軍と同等の損害を負い政府軍の軍事的弱点を露呈した。この内戦は日本のその後の富国強兵政策の礎となった。なお大磯から西南戦争で戦没された方は5名、愛宕神社に慰霊碑が建立されている。この戦いの後、板垣退助らを中心に国会開設や憲法制定を求める自由民権運動に移行した。明治13年フランス留学から帰国した西園寺公望も「東洋自由新聞」を発刊、民権運動を支援した。(つづく)

【編集後記】 新年を迎えて早や1か月が過ぎようとしており、新型コロナの感染拡大も続いておりますが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか？当ガイド協会も活動自粛の中、本誌発行も昨年後半より一時中断のやむなきに至っておりましたが、本号より紙面印刷を再開することといたしました。これを契機に、現在のガイド活動自粛を「禍」とすることなく「次の高みへの飛躍」の準備期間にしたいと思っております。なお本号では、現在と同じく100年前に世界的に猛威を振った「スペイン風邪と大磯」を特集記事とし、また「自由民権運動と大磯」の連載を開始しましたので期待ください。

(飯田 隆昭)